

純粋な少年、熱量込め描く アニメ「ペンギン・ハイウェイ」

■京都精華大出身・石田祐康さん監督

少年のひと夏の不思議な体験を描いたアニメ映画「ペンギン・ハイウェイ」が17日から全国公開される。監督は本作が長編デビュー作となる京都精華大出身の若きアニメーター石田祐康さん(30)。「純粋でひたむきな少年の物語を、熱量を込めて描きたかった」と、作家森見登美彦さんの同名小説のアニメ化に挑戦した。

主人公は小学4年のアオヤマ君。毎日、学んだことをノートに記録する利発な少年だ。ある日、街に突如ペンギンの群れが現れた。どこからやってきて、どこへ向かうのか。仲間たちと研究を進めていくと、いつも通っている歯科医のお姉さんが秘密の鍵を握っているようなのだが…。



「少年のキャラクターに助けられました。何げないシーンでも魅力的になった」と語る石田さん(大阪市区)

「困難に立ち向かい、乗り越えていく少年たちを主役にしたジュブナイルもの」の制作を構想していた石田監督が原作に出会ったのは数年前。当初は「思慮深い内容」に戸惑いもあったが、物語の流れに沿って印象的なシーンを描き出し、セリフを添えた「ストーリーボード」を何枚も制作するうちに「魅力的なアニメ映画になる可能性を感じた」という。

「アオヤマ君はとても真っすぐな少年。ただ、その描写には、森見さんならではの『ひねり』があって、言い回しの面白さがある」と石田監督。独特の語り口を生かすため、人物をロングショットで捉えたシンプルな映像にセリフをのせるなど、原作の持つユーモアを生かす工夫を重ねた。京都の劇団「ヨーロッパ企画」の上田誠さんによる脚本も、少年のキャラクターを際立たせた。

また、少年の目線だからこその壮大な世界観も魅力の一つ。「レゴブロックで作ったようなかわいくて明るい色の家が多くなる」「街全体がぴかぴかして」などの記述を手掛かりにイメージを膨らませ、「描写が少ない場面は想像力で自由に描いた」と語る。その結果生まれたオープニングは、街全体をなめるようにカメラが移動する疾走感あふれる映像に仕上がった。

愛知県出身の石田監督。「大学時代は京都がいい」と京都精華大に進学した。4年余りを過ごし「学生に優しく、いろんなことを大目に見てくれる。京都は第二の故郷です」。現在は都内に暮らす「今はデジタル作画の時代。京都や愛知などいろんな地域に暮らすクリエイターと一緒に作品を創っていきたいですね」と話す。

【2018年08月16日 16時30分】

Copyright (c) 1996-2018 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd. All rights reserved.

各ページの記事・写真は転用を禁じます。著作権は京都新聞社ならびに一部共同通信社に帰属します

[ネットワーク上の著作権について](#) [新聞・通信社が発信する情報をご利用の皆様](#)に(日本新聞協会)

[電子メディアおよび関連事業における個人情報の取り扱いについて](#)